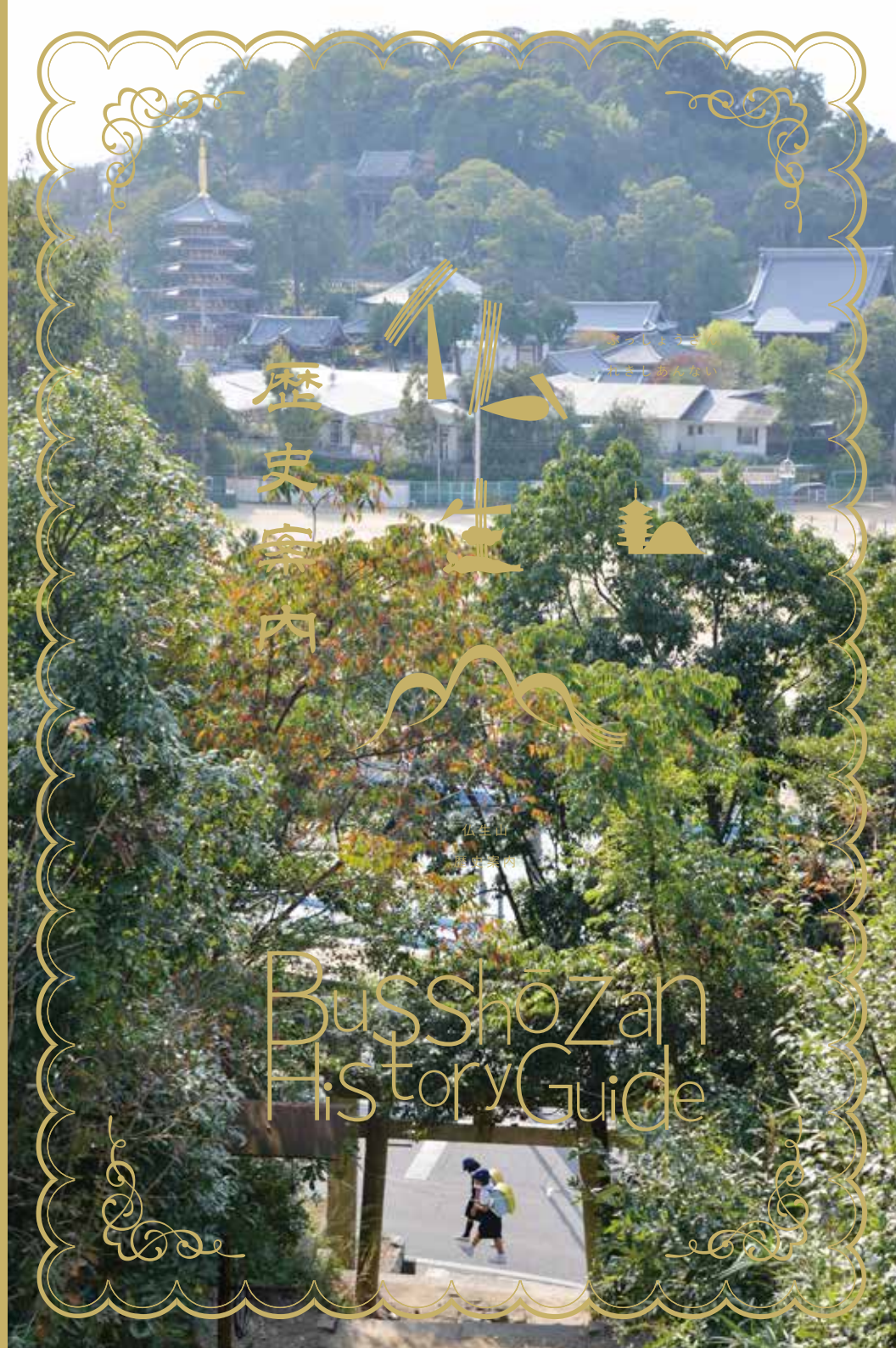
busshozan-community.info

仏生山歴史案内

2016年1月
発行／仏生山コミュニティセンター　香川県高松市仏生山町乙45-4　TEL/FAX 087-889-4955　Printed in Japan.



仏生山歴史案内

Busshozan History Guide

仏生山は高松市中部地域の最も南にあり、高松平野のほぼ中央部に位置するまちです。まもなく完成する高松市新病院や、高松市地域政策組織の中核を担う高松市南部総合センターの整備を間近に控え、高松市南部の地域交流拠点になろうとしています。

高松空港や高速道路のインターも近いうえ、ことでん琴平線も通っており、公共交通のアクセスは非常に便利です。また桜から紅葉まで楽しめる緑豊かな環境に体育施設を併設した「仏生山公園」は、市民の憩いの場となっています。こうした暮らしやすさから、近年はUターンや移住者が増えるとともに新しいお店も増えており、県内外から注目を集めているエリアです。

また高松藩主・松平家の菩提寺である法然寺やちきり神社、門前町ならではの歴史街道筋は、歴史・文化の宝庫でもあります。江戸時代、歴代藩主が墓参りをする際に大名行列が練り歩いたという全長1.3kmのお成り街道を中心に、あの時代特有の建築様式の家屋が今も残っています。

このたび、多くの方々のお力添えにより仏生山歴史案内本を発刊する運びとなりました。この機会に仏生山の歴史をひも解き、皆さまにこのまちの素晴らしさを再認識して頂くと同時に、今まさに変わりつつある仏生山のまちづくりの礎となることを願っております。

仏生山地区コミュニティ協議会一同

2016年3月

はじめに

P01-02　はじめに・目次

P03-04　仏生山の年表

＜ちきり神社＞

P05-06　ちきり神社／いわざらこざら伝説

P07-08　阿波国の豪族 田口成良／平池改修

P09-10　コラム

（橋本タカ子さん 仏生山の思い出／石神夏希さん）

＜法然寺＞

P11-12　法然寺／浄土宗の開祖法然上人ゆかりの寺

P13-14　仏生山大名行列

P15-16　そうめん造り

P17-18　讃岐の 寝釈迦

P19-20　コラム

（仏生山でかつて賑わいをみせた競馬場／

考古学者 乗松真也さん）

＜門前町＞

P21-22　大名のつくった仏生山の門前町

P23-24　風物あれこれ

P25-26　かつての仏生山

P27-28　地図であるく仏生山のまち

仏生山の年表

Timetable of Busshozan

先史前	紀元前　1400万年前、高松クレーターができる。
大和	600頃　万塚古墳
奈良	750頃　百相、創建。（のち船山神社の神宮寺に） 940頃　「和名類聚抄」に「毛毛奈美」の記載がある。
平安	1178　阿波民部大夫・田口成良、平清盛と子・重盛の命により平池を改修。（いわざらこざら伝説） 1185　河西左衛門尉輝貞、源平合戦の武功から百相の地を拝領。陣屋を築く。（百相城）
鎌倉・室町	1207　法然上人、讃岐配流 1540　百相城主・宗鹿広里、大野氏と戦い百相坂にて戦死
安土桃山	1600　百相城主・別所小十郎長行、関ヶ原で戦死（子孫は庄屋になる）

江戸	1688　賴重公、法然寺の造営をはじめる。 1670　法然寺、落慶。山号・仏生山 1673　朱印地・讃岐国仏生山（法然寺）領に。 芝居の興行が許されていた。 賴重公、素麺業を法然寺・門前町へ集約。城下町から問屋4、5軒が移転。 幕末前には50軒余に。
明治・大正	1898　町制施行、仏生山町に。 1906　立つ馬場、開催（〜1926） 1912　桜座、発足（1915、改装し香川座に） 1914　大黒座、落成（〜1944） 1926　琴平電気鉄道、仏生山駅を設置
昭和	1929　仏生山競馬、開催（〜1939） ガソリンカー塩江温泉鉄道、開業（〜1941） 1956　高松市と合併。仏生山町に 1960　船山神社の大楠、県天然記念物に
平成	1990　金沢大学・河野芳輝教授らが重力調査。伏在陥没構造（高松クレーター）を発見。

滕（ちきり）神社は香川町浅野の唐土に祀られていたが、今は平池となっているところにかつては松原があり、万寿年間（1024～27）、そこに遷された。

しかし久安年間（1145～1150）には社殿の周りにため池が築かれたため、大洪水のときなど社殿がたびたび水に浸かることがあった。そこで浅野村字岡の上に遷され、その後、平池の北東である雄山に遷された。これ以来、岡の上のかつて社殿があった地は「古宮さん」と呼ばれている。

さらに寛文 9 年（1669）には高松藩主・松平頼重が法然寺を造営するため、ちきり神社を雄山から秣山に遷された。そして雄山には、法然寺が建てられた。以後は松平家歴代藩主の信仰を受け、神社の領地として六石が寄進された。

神社の格式としては、石清尾八幡宮（高松宮脇町）、中野天満宮（高松市天神前）、道祖神社（高松市宮脇町）、稲荷神社（高松市中央町）と同格で、ちきり神社の神主は毎年正月、高松城の書院において高松藩主に拝謁することが許されているほどであった。

また、神社内の境内東北の隅には「宗源壇」という祈禱書が設けられ、国中に事があるときは高松藩主も祈祷を行い、お札やお守りを配布されたこともあったといわれる。

ちきり神社は、現在の地に鎮座して以来三百数十年変わらず、仏生山、そして旧浅野村の実相寺、船岡、岡の上、池の側などこの一帯の地域の氏神として、多くの人たちから敬われている。

いわざらこざら 伝説の乙女を祀る

Chikiri shrine

15 ちきり神社 Chikiri shrine

ちきり神社は百相村の産土神（うぶすながみ）。寛文 9 年（1669）高松藩主・松平頼重公は、雄山（法然寺建立の地）にあった神社を東の雌山に遷宮（せんぐう）して、下浅野百相村の産土神とした。

社地である雌山は別名「秣山（まぐさやま）」ともいう。山の麓を含め、秣（牛や馬の飼料となる草）の入会地（いりあいち）（村落の共有地）であったと思われる。また法然寺の門前に位置したので、前山とも言われる。伝説「いわざらこざら」で有名な乙女を祀る神社でもある。

19

平池

Heike pond

阿波国の豪族 田口成良

名西郡石井の桜間城を居城とし、大きな力を持つ豪族であった。四国の木材を輸出して財をなしたといわれる。その木材は現在の徳島県にあたる南部の宍喰（ししくい）や海部（かいふ）から大船で阪神に運ばれたことから、田口氏は海上交通を支配していたものと思われ、「海賊の大将」ともいわれる。「阿波民部大輔」を名乗り、平清盛に仕えた。

永暦元年（1160）より大輪田泊（兵庫県神戸）の造営に尽力。応保２年（1162）工事責任者である再築奉行となり、安元元年（1175）の完成まで中心的役割を果たした。また大輪田泊を拠点に盛んだった日宋貿易も担当したといわれる。後に阿波だけでなく、讃岐にかけて勢力を拡大。治承２年（1178）には、現在でも「いわざらこざらの伝説」で知られる讃岐の平池を再築した。

その後は四国一円を支配下に置き、屋島に平家の拠点を造り源氏と戦った。寿永４年（1185）屋島の合戦で平家が源氏に敗退する前後には、一族が平家を裏切り、成良も「壇ノ浦の合戦」の最中に阿波水軍ごと源氏に寝返った。

しかし鎌倉に送られた後、源氏により処刑される。滅亡直前の寝返りを武士として不忠と責められたとも、かつて平家の先陣として奈良を攻めた際に東大寺大仏殿を消失させた罪で罰せられたともいわれる。

平池改修・乙女の像・いわざらこざら

平池は久安年間（1145～1151）に造られたため池だが、治承２年（1178）に災害によって改修を余儀なくされている。平清盛の命により、この改修の指揮を執ったのが阿波民部大輔・田口成良であったと伝えられる。

だがこの事業は相当の難工事であり、何度改修しても堤が決壊してしまった。困り果てた成良が神仏に祈願したところ、「明日の早朝〝ちきり〟を持った者が池のそばを通りかかる。その者を人柱に立てるがよい」との託宣を受けた。

そこできっそく役人が待ち構えていると、一人の娘が通りかかった。役人の「何を持っておるか」という問いかけに、何も知らない娘は「ちきりです」と正直に答えてしまった。役人は有無を言わさず娘を捕らえると、あらかじめ掘ってあった穴に投げ込んでそのまま生き埋めにしてしまったという。

平池はこうして改修を完成し、決して堤が決壊しない池となった。そして、娘を祀る社も建てられた。

ところが堤の東端あたりにいつの間にか隙間ができており、そこから水が漏れ出るようになった。その水の流れによくよく耳を澄ませると「いわざら、こざら」とつぶやく人の声に聞こえる。人々は、これを「言わざらまし、来ざらまし（言わなければよかったのに、来なければよかったのに）」という娘の嘆きに違いない、と噂し合ったという。

だが昭和42年（1967）に改修が行われ、この隙間も埋められた。現在では人柱となった娘の冥福を祈るため、池のほとりに乙女の像が立てられている。

橋本タカ子さん
仏生山の思い出

仏生山は歴史のあるまちです。それまではもう原っぱだったんやけど、法然寺ができて、御城下のようなまちをつくろうと。讃岐高松の素麺とかうどんとか（の製造を）全部止めて、ここでだけ許したんや。平池に水車があったの。「平池がかりの三条の車」という歌があるんやけど、そこで粉を引かせて全部みんなに使わせてやって。「素麺会所」というのが今の郵便局の斜め前の細道のところにあったん。お城から家来が来てね、素麺とかうどんが上等かどうかいうのを調べて、よけりゃあ全部お買い上げになる。法然寺には井戸が二十あって、食べ物やなんかを入れる蔵も全部あった。

なんでこないに昔のこと知ってるか言うたらな。私は大正15年生まれ。妹のお産で死んだお母さんの顔は覚えてないけど、おばあちゃんが昔話とか法然寺の百叩きの話とかね、いろんな話してくれたの。だってお母さんがないんだもの。私ひとり。な。明治4年に私のおばあちゃんが生まれた時にね、（祖母の）お父さんは殿さんについて、二十年お江戸へ行って帰らなかったん。おばあちゃんも、（祖母自身の）おばあちゃんの話を聞いて育ったんでしょうね。

私は、お寺が経営していた相愛幼稚園の第一回の卒園生。園舎ができるまでは、本堂でかくれんぼなんかして遊んだ。ご仏殿の鐘を叩いて怒られたり。その頃の仏生山小学校は、ちきり神社の東側。私は小学校でランドセル買うた一人目だったと思う。重いからおばあちゃんがな、乳母車に乗せて押してくれて。他の子はみんな、ふくさを腰に縛ったり横へカバンさげたりしてたから、校長先生が「お前、お嬢ちゃんもええとこや」言うて。みんな学校から帰るときにね、法然寺の境内に松葉やなんかいっぱい落ちてるのをかき寄せて持って帰ってね、お風呂の燃料にしたん。仁王様の前の広庭で、運動会したりね。私のお母さんも仏生山小学校の卒業生で、おばあちゃんの頃は寺子屋やった。

仏生山は、いろんな娯楽がありました。料理屋さんとうどん屋さんで6、7軒はあったでしょうね。明治楼あり観翠あり、昔は三好楼というのもあった。競馬場もあったんよ。ガソリンカーが塩江温泉まで通ってました。だけど途中に峠があって、坂が登れんからね、お客さんが降りて押した。そんな時代だったんですよ。

ちきり神社の階段の下の表通りに「芝居町」いう名前が残っとるけど、（琴平の）金丸座と同じような芝居小屋があったん。回り舞台だったんですよ。江戸時代にはお寺（お坊さんの席）もあるし、御前桟敷というのがあって、殿様も来よった。

夕方になったらみんな、懐中電灯やら提灯やら持ったりして、畑の方から遊びに来る。クラスメイトのお父さんがちんどん屋をやって、男の子が旗を担いでね。ついていったら、入場料を半分にしてくれた。子供の頃は毎日くらい遊びに行った。

…私が生まれた時にね、お父さんが屋島石を取ってきて、記念に庭をつくったん。瀬戸内海国立公園になったんは昭和8年、私は大正15年生まれやから記念にできた。

その石は、今でも残してあります。

プロフィール

石神夏希さん

劇作家。劇団「ペピン結構設計」を中心にさまざまな土地でのアートプロジェクト、まちや暮らしに関する執筆・企画など、「場所」と「物語」を行き来して活動する。

浄土宗の開祖 法然上人 ゆかりの寺

Hōnen temple

法然寺と頼重公

法然寺はもともと、建永2年（1207）に75歳で讃岐に流された法然上人が住んだ小松庄生福寺である。寛文 8 年（1668）、高松藩主・松平頼重がこの小松庄生福寺を百相（現在の仏生山）に移し再建して、仏生山来迎院法然寺と改称し、松平家代々の菩提寺とした。

高松藩主 松平家

頼重は徳川家康の孫であり、〝水戸の黄門さま〟こと徳川光圀の実兄にあたる。父・徳川頼房は、徳川御三家の一つ・水戸徳川家の初代である。元和 8 年（1622）、頼重は水戸徳川の長子として江戸に生まれ幼名を竹丸といった。出生時、父の兄にあたる御三家の尾張徳川家、紀伊徳川家ともにまだ男子の出生がなかったため、頼重は生まれてまもなく家臣に預けられた。

周囲は秘かに父の養母であり祖父・家康の愛妾であった英勝院に相談し、頼重はその庇護を受けて育った。後年、母・久晶院が再び懐妊し、生まれた弟が水戸光圀である。

寛永16年（1939）常陸国下館藩（現在の茨城県筑西市）で五万石の大名となり、以後「松平頼重」と名乗るよう父・頼房から申し渡された。寛永19年（1642）には21歳という若さで讃岐高松十二万石の藩主となった。

寛永 1 年（1644）下総国古河藩（現在の茨城県古河市）十六万石城主の娘・万姫と結婚。万姫の妹は松平家が高松藩に入る以前に当地を治めていた生駒家の第四代藩主・生駒高俊に嫁いでおり、頼重は前藩主と義兄弟となった。

高松十二万石の藩主となった頼重は、エネルギッシュに新しい藩政に立ち向かった。城郭の修築、城下町の拡張整備、そして水道を設備し、開墾を積極的に奨励。「讃岐のため池」を増築した。

16 法然寺 Hōnen temple

仏生山町にある浄土宗の開祖法然上人ゆかりの寺。三方を池に囲まれた境内には多くの堂宇があり、その中でも全長3m、木造涅槃像は讃岐の寝釈迦として全国的にも珍しいものである。

仏生山本町通りは江戸時代、高松藩主・松平頼重をはじめとした歴代藩主がお墓参りのため、玉藻城より菩提寺である法然寺へと向かう通り道であった。このため「お成り街道」と呼ばれていた。

平成５年（1993）、高松市南部地域の活性化と門前町の歴史を伝えるべく、頼重公の参拝の様子を再現した「高松秋のまつり仏生山大名行列」が高松市地域おこし事業として始まった。

これは、公募で選ばれた約50名の市民が「高札奴、先払侍、毛槍奴、道中奉行、警備侍、目付、近習、家老、殿様、奥方、姫、待女、少年武者、かわら版売り」に扮装して、「お成り街道」を練り歩くというもの。古くから続く町家造りの旧家が並び、今もなお門前町の面影を残す参道。その真ん中をおごそかな様子で進む藩主や姫君、侍らは豪華絢爛な衣装を身にまとい、詰めかけた見物客たちは沿道から行列に声援を送ったり撮影したりと、江戸情緒あふれる光景を楽しむ。

行列は駅前近くを出発すると「お成り、お成り」の掛け声に合わせ、法然寺の先の仏生山公園まで約1.5kmの道のりをゆったりと進んでいく。道中には頼重公を狙う悪党が登場。迫力満点の殺陣シーンやコミカルな芝居が盛り込まれるなどエンターテイメント性も高く、見物客の歓声や笑いが絶えない。

仏生山大名行列

Feudal lord's procession

また大名行列に合わせ、野外劇場、菊花展、フリーマーケット、忍者城、飛脚に扮した小学生たちの駅伝大会といったさまざまなイベントがまちの各所で開かれる他、前夜には秋には珍しい花火大会が開催される。この時は法然寺の五重塔もライトアップされ、花火との美しい競演を見せる。

現在（平成27年）では地域住民約１０００人がボランティアで参加してお祭りを盛り上げ、県内外から約15万人もの来場者でにぎわう仏生山最大のイベントとなっている。

寛文8年（1668～）から三年間の月日をかけて松平家の菩提寺・法然寺を造った松平頼重は、寺の造営に引き続いて、仏生山街道を南北に通した。仏生山街道の道幅は六間（約11m）あり、江戸時代の国道に匹敵する広さであった。

頼重は門前町をつくるべく、その道に沿って奥行き三十間（約60m）という広い敷地を用意し、必要なだけの間口を区切って無料で貸し与えることとした。しかし当時はにぎわいもなく、商売が繁盛するという見込みも立たない仏生山に移り住む人は少なく、門前町はなかなか形成されなかった。

そこで松平頼重は、約11mの広い道幅を利用する思い切った方策に打って出た。延宝年間（1673～81）から高松藩内の素麺業者すべてに素麺つくりを中止させ、仏生山に移住したものにだけ素麺製造を許したのである。

原料にはこの地方の小麦を使い、平池の水を利用して水車三丁で小麦をひかせて、素麺を造る業者に無利子で貸し与えた。できあがった素麺は高松藩がまとめて買い上げて、支払いする代金の中から貸した原料代を差し引く、といった特別な計らいをした。

こうした高松藩の働きかけによって、多くの素麺業者が仏生山に移り住んだ。道幅の広い本町通りには手延べ素麺を干す目板が並び始め、門前町も次第に形になっていった。

そして、もともと仏生山に住んでいた人たちも、移って来た職人たちからその製法を習い、注文を受けて素麺づくりをするようになった。このため高松藩は仏生山内に「素麺会所（専売品の生産管理・販売を行う役所）」と呼ばれる施設をつくり、城から役人を差し向けて買い上げの事務や品質管理に当たらせた。

その後、素麺会所は文化二年（1805）には閉鎖されたが、できあがった素麺の品質の良さは他藩にも認められ、仏生山素麺は讃岐の特産物として全国にその名を知られた。ますます麺づくりは盛んになり、「讃岐仏生山素麺どころ、雨が降ったならぬわざ」と歌にまで歌われるようになった。

明治時代に入り、讃岐名物手延べ素麺の工程も少しずつ機械化されていったが、昭和16年に第二次世界大戦が始まり食糧統制が敷かれるまで、仏生山本町通りでは道筋で素麺が造られていた。真っ白く仕上げられた糸のような素麺が風になびくありさまは、まるで一幅の絵のようであったという。

素麺産業には小束、箱詰め、ラベル貼りといった女性ができる軽作業があったため、地域の家計も支えていた。仏生山の素麺銘柄では特に「月の友」、「松の雪」、「島の誉」、「滕の誉」等が有名であった。昭和の末頃まで仏生山の素麺造りは続いたが、時代の移り変わりとともに、徐々に姿を消していった。

現代の仏生山では素麺づくりは見られなくなったが、地域のお祭りでは今も流し素麺が行なわれ、子供たちに素麺特区の記憶を伝えている。

そうめん造り

Thin wheat noodles

大正～昭和初期の商店街

Horse racing

仏生山でかつて賑わいをみせた競馬場

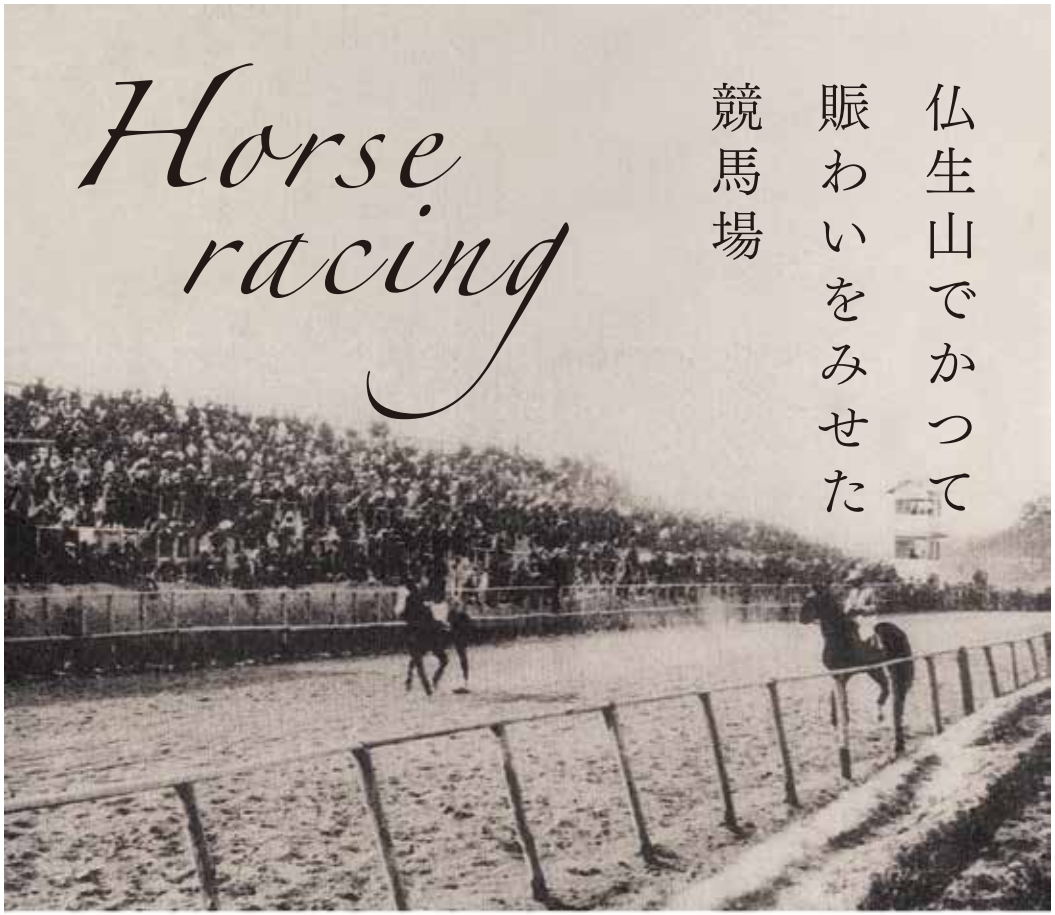
「血わき肉踊る仏生山町競馬大会」

昭和４年の新聞の見出しである。翌日に仏生山での競馬初開催を控えた紙面は、ほぼ全面に競馬の記事と広告を掲載し、祝賀ムードにあふれている。

昭和４年10月18日から20日までの３日間、香川郡仏生山町（現在の高松市仏生山町）の競馬場を舞台に香川で初めての競馬が行われた。馬は香川や四国に留まらず、大阪、兵庫、岡山、広島などからも集まった。いよいよ午前11時20分、第１レースのスタートが切られ、出走馬は一周１０００ｍの楕円形コースを蹄鉄の音を響かせて走り抜けた。初レースの１着馬は「小松島」号、賞金は50円だった。12のレースが行われた初日の観客は、新聞に５万人とある。多少の誇張分を差し引いても一日に数万人の人が仏生山に押し寄せたのである。当時としては相当な規模のイベントだったのだろう。翌日の観客はさらに増えて６万人、３日目の記録はないが、日曜日で売り上げも多いことから観客数は２日目以上と思われる。

好評を博した仏生山競馬は、翌年以降も毎年春秋の数日間に行われて多くの観客を集めたが、社会情勢の変化もあって昭和13年秋の開催で廃止されることになった。最後となった３日間は快晴続きの競馬日和で、10月９日の第12レース、「奈良神風」号の優勝で仏生山競馬は幕を閉じた。競馬場の施設は解体され、土地はほどなく田畑へと姿を変えた。

さて、古い写真でしか見ることのできない仏生山競馬場だが、その痕跡は今でも現地に残っている。平池のすぐ東側に走る南北方向の道路は直線コースの名残で、馬券投票所や事務所などの施設もこのあたりにあった。この直線コースを南に向かってしばらく進むと、緩いカーブを描く畑が左手に見えてくる。畑はカーブの先で直線状に連なる畑につながる。ここが二つのコーナーと向正面の直線になる。やや不自然なかたちの道路や畑をたどっていくと、80年前に無くなった楕円形のコースが浮かび上がってくるのだ。大勢の観客の声援を背に数千頭の馬が駆けたコースを実際に訪れてみてはどうだろう。



仏生山競馬場

競馬場馬みせ

プロフィール

乗松真也さん

1974 年愛媛県松山市生まれ。香川県教育委員会 文化財専門員。専門は考古学。特に漁撈の道具を通して、人々と瀬戸内海との関わりについて考えている。

「嵯峨の立ち釈迦、讃岐の寝釈迦」と謳われた涅槃像。釈迦の臨終の場面を描いた「涅槃図」を立体化して表現したものである。

三仏堂（涅槃堂）内部には、今まさに入滅した（亡くなった）釈迦を中心に、人物鳥獣52体がほぼ実物大で再現されている。

中央に、静かに横たわる巨大な金色の涅槃像。足元には医者が立ち、釈迦が亡くなる様子を見守っている。その周りには、さまざまな表情・姿で嘆き悲しむ十大弟子たち、三菩薩や、鳥獣類までが集まり、この世を去るお釈迦様を惜しんでいる。

天井そばには飛雲に乗った釈迦の生母・摩耶夫人が、天から降りて来て釈迦に薬を投げる様子が表現されている。これが「投薬」という言葉の語源ともいわれている。

出城としての法然寺

法然寺は高松城の南の守りとして知られ、いざという時は軍事的にも重要な出城としての役割を果たす設計になっている。

松平頼重は、高松城下は阿波や土佐からの山越えで攻めてくる敵に対する一番の守りが手薄であったことから、百相村（仏生山近辺）に出城を造りたいと考えていた。しかし天下統一され、徳川の世になって60年。いくら家康の孫とはいえ、出城を勝手に築くことは許されなかった。

〝ならば出城の代わりになるような寺を〟と考えたが、幕府からは浄土宗本山へ示した35か条の諸法度の中で「みだりに個人の寺を建ててはならぬ」というお触れが出ていた。

そこで、建久2年（1191）に讃岐へ流された法然上人の遺跡である満濃町の小松山生福寺を〝百相の地に移して再興する〟という名目で、法然寺の建設を始めたのである。

法然寺は寛文8年（1668）竹井斎庵の設計で起工、三年後に落慶法要が行われた。工事の途中、山頂から仏舎利が出てきたことから、この寺の山号は〝仏生まるる山〟という意味の「仏生山来迎院法然寺」と名付けられた。

法然寺の後ろに建つ丘は標高85mほどで、頂上は「般若台」と呼ばれ、松平家の墓所がある。近年では高松藩第十一代藩主・松平頼聰（よりとし）の遺骨が、東京・谷中霊園から法然寺の松平家墓所に移転されている。

讃岐の寝釈迦 Nirvana

16
法然寺
Hōnen temple

Horse racing

仏生山でかつて賑わいをみせた競馬場

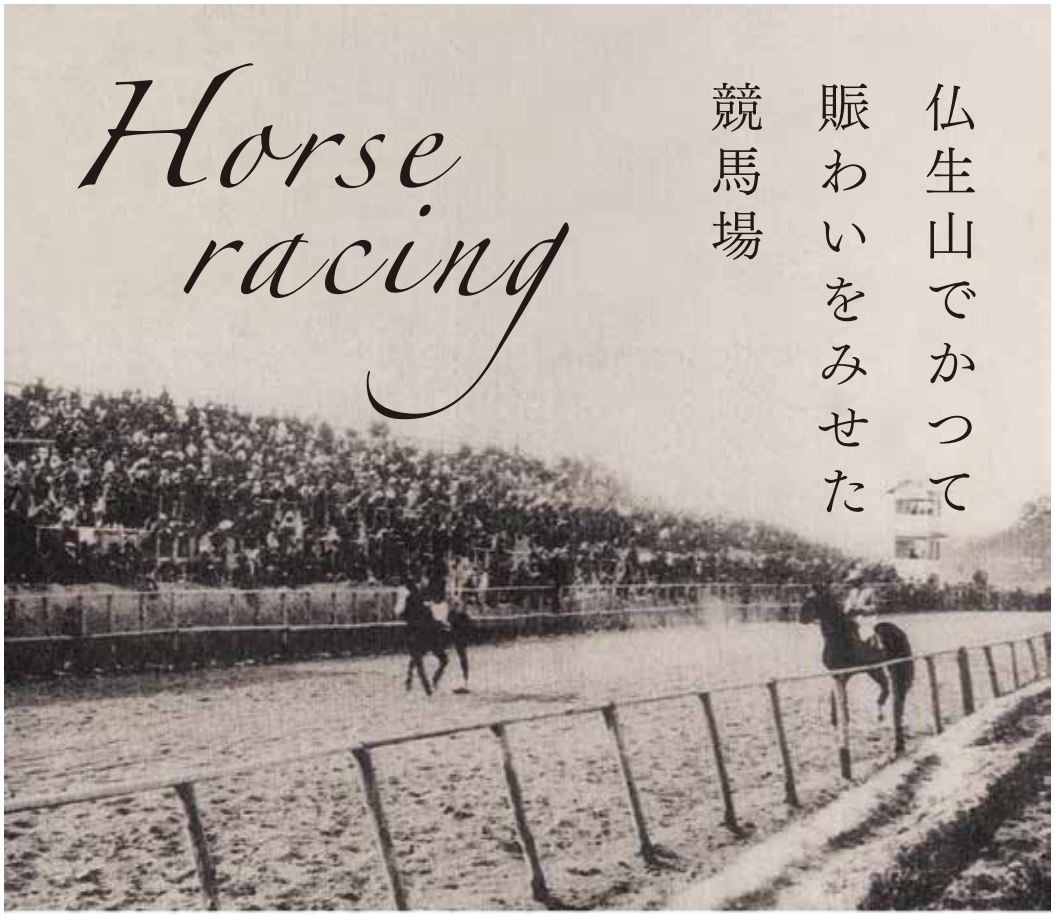
「血わき肉踊る仏生山町競馬大会」

昭和４年の新聞の見出しである。翌日に仏生山での競馬初開催を控えた紙面は、ほぼ全面に競馬の記事と広告を掲載し、祝賀ムードにあふれている。

昭和４年10月18日から20日までの３日間、香川郡仏生山町（現在の高松市仏生山町）の競馬場を舞台に香川で初めての競馬が行われた。馬は香川や四国に留まらず、大阪、兵庫、岡山、広島などからも集まった。いよいよ午前11時20分、第１レースのスタートが切られ、出走馬は一周１０００ｍの楕円形コースを蹄鉄の音を響かせて走り抜けた。初レースの１着馬は「小松島」号、賞金は50円だった。12のレースが行われた初日の観客は、新聞に５万人とある。多少の誇張分を差し引いても一日に数万人の人が仏生山に押し寄せたのである。当時としては相当な規模のイベントだったのだろう。翌日の観客はさらに増えて６万人、３日目の記録はないが、日曜日で売り上げも多いことから観客数は２日目以上と思われる。

好評を博した仏生山競馬は、翌年以降も毎年春秋の数日間に行われて多くの観客を集めたが、社会情勢の変化もあって昭和13年秋の開催で廃止されることになった。最後となった３日間は快晴続きの競馬日和で、10月９日の第12レース、「奈良神風」号の優勝で仏生山競馬は幕を閉じた。競馬場の施設は解体され、土地はほどなく田畑へと姿を変えた。

さて、古い写真でしか見ることのできない仏生山競馬場だが、その痕跡は今でも現地に残っている。平池のすぐ東側に走る南北方向の道路は直線コースの名残で、馬券投票所や事務所などの施設もこのあたりにあった。この直線コースを南に向かってしばらく進むと、緩いカーブを描く畑が左手に見えてくる。畑はカーブの先で直線状に連なる畑につながる。ここが二つのコーナーと向正面の直線になる。やや不自然なかたちの道路や畑をたどっていくと、80年前に無くなった楕円形のコースが浮かび上がってくるのだ。大勢の観客の声援を背に数千頭の馬が駆けたコースを実際に訪れてみてはどうだろう。



仏生山競馬場

競馬場馬みせ

プロフィール

乗松真也さん

1974 年愛媛県松山市生まれ。香川県教育委員会 文化財専門員。専門は考古学。特に漁撈の道具を通して、人々と瀬戸内海との関わりについて考えている。

大名のつくった仏生山の門前町

03-14 門前町 Temple town

殿様がつくられた門前町
仏生山高徳寺参道前。この辺りが、寺領の北の境界であった。松平頼重は門前町形成のため、仏生山街道に沿った奥行三十間という非常にスケールの大きい土地を解放し、ここに移り住んだ者には地子（致仕＝年貢）・運上（税金）・諸役御免とするお触れを出し、領民の移住を促した。

高松藩主・松平頼重は寺の繁栄と不時の出費に備えるため、商人を呼んで土地を与え、商売させようとした。そして近在から人夫を集め、野原を切り開いて宅地を造らせた。仏生山が門前町となった始まりである。

町の行政として、町年寄（町長に当たる）が任命された。最初は法然寺造営に寄与した大庄屋野口仁左衛門が任命され、そのとりまとめ役として小田十右衛門が町年寄となった。また百相村からは別所九兵衛を差配として、川地弥次右衛門・中條林左衛門などが代々の町年寄に名を連ねている。

移り住んだ者には税金や掛りごとを免除するというお触れを出し、誰でも願い出れば土地を与えるから家を建てて商売してもよい、としたが、なにぶん新地である。交通不便で将来繁盛する見込みがないと思ってか、すぐ仏生山で商売を始める人は少なかった。そこで頼重は新しいお触れを出した。城下に散らばっていた素麺業者の営業を停止させ、仏生山の門前町でのみ営業を許すことにしたのである。この制度によって仏生山に次第に業者が集まるようになり、町らしくなっていった。この辺りの道路が広いのは、かつて素麺の干し場であったためである。

初めにできた仏生山の門前町は前山坂道・上町・中町であり、その付近から町が発達していった。街道筋に当たる本町通には、円光寺辺りから南にかけて古い商家や町家が残り、かつて門前町だった頃の面影を見出すことができる。

城下町、街道筋の宿場町と同じくお寺の門前に発達したのが門前町であり、その町家（商家）の建物の様式を「町家造り」という。

屋敷の構えとしては、中二階に土で塗り込めた虫籠窓（虫かごのように組んだ格子をはめた窓、池の屋に現存）。一階は明かりとりの連子窓（木や竹の桟を縦に並べたものをいうが、縦横に組んだ格子と混同して一般に連子と呼んでいる）を取付け、重厚な中にも民芸的な美しさを見せている。

また大名行列の際など殿様を見下ろすという無礼が起こらないよう、2階を低くした中2階建ての家・虫籠窓の家・うだつを上げた家などが残っている。

仏生山の門前町界隈は、今でもこうした往時を思わせる風情を留めている。

Temple town

写真：左建物
明治商工銀行（明治25年）
百相警察署　（明治26年）
百相郵便局　（明治31年）

01 船山神社

船山神社は県道280号線沿い、仏生山町に鎮座する神社。『香川県神社誌』には、「百相神社」として記載されている。境内にクスノキの大木があり、県指定天然記念物となっている。

02 百相城跡

讃岐別所家の城跡。播州三木城主・別所長治の子とされる別所源兵衛長行が、三木合戦で天正8年（1580）織田信長軍羽柴秀吉に落城させられ、讃岐に逃がれ善通寺に入ったが、出家を拒んで香川郡百相（現在の仏生山町）に構えたもの。

03 桜座跡（香川座）

明治45年（1915）町内の有力者が発起人になり、回り舞台やせり上がりを備えた木造二階建ての芝居小屋「桜座」が建てられた。大正4年「香川座」と改められ、歌舞伎や芝居などを上演していた。

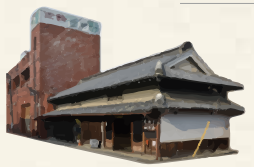
04 天満屋「うだつ」

天満屋のうだつはその昔、左官屋たちが腕を競って塗り上げたもの。繁栄の証の「袖うだつ」が残る、堂々たる店構えである。

05 円光寺

永禄8年（1565）の創立で、天和3年（1863）この地に遷された。元禄（1688～1704）の頃、火災で本堂などが焼失したが、境内のイチョウが水を吹きご本尊を守ったと伝えられる。

06 神崎屋「連子窓」



創業200年を超える老舗の醸造所で、家屋は江戸末期に建てられ、仏生山で最も古いといわれる。建物の路地側を入母屋造りとし、表の中二階部分に「うだつ」、「虫籠窓」が見られる。

一階表は昔ながらの重厚な「連子窓」や古い商標が掲げられ、屋内に露出した小屋組の一部が店の歴史を物語っている。

07 生目さん

目の病にご利益がある八幡。内部に「かげきよさま」と呼ばれる古い木像と神鏡が祀られている。これは源平合戦・屋島の戦いの「しころ引き」で有名な武将・悪七兵衛景清のことで、目の神様として人々から信仰されている。

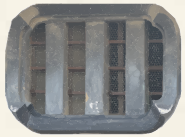
08 水神さん

江戸時代の町年寄・中條本家の屋敷跡に中條家が井戸を掘り、水を守る神を祀って屋敷神としたと思われる。こうした表通りの井戸は水道が普及するまで、町の人々の暮らしを支えてきた。

09 高徳寺

永禄年中（1558～70）の創建と言われ、享保8年（1723）、大野（現在の香川町大野）の豪族・佃半左衛門の寄進により、この地に移転新築された。嘉永5年（1852）の火災で焼失したが、門徒の協力により文久2年（1862）に再建された。

10 池の屋「虫籠窓」



大名行列を見下ろせないように、漆喰で塗り固めた中二階の窓。窓枠に虫籠のように木の格子がはめ込まれていることからこの名がついた。「池の屋」は元造り酒屋であった。

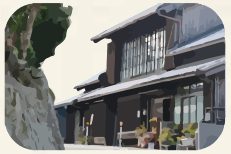
11 上酒屋「懸魚」

懸魚のある町屋。懸魚は社寺建築に多く見られるもので、屋根の破風に取り付けられた装飾。もとは棟木・桁の木口を隠すものであったが、次第に装飾化されていった。

12 山本呉服店

150年以上前に建てられた当時の面影を今なお残している。奥行き30間（約54m）の敷地の裏側には堀割りがあり、頑丈な「なまこ壁」の土蔵を有する。

13 前山坂道



江戸時代、この坂道を通って法然寺へ参詣できるのは侍や町年寄りといった身分の高い人のみで、一般の人は裏門から参詣することを常としていた。維新後はすべての人に自由な往来が許された。

14 大黒座跡

戦前までにぎわった芝居小屋跡。大正3年（1914）、上町に建てられた。カンカラ太鼓が「ちきり山」から近郷近在に響くと、人々は娯楽を求めて列を成したといわれる。

ガソリン道

昭和４年に塩江温泉鉄道株式会社が開業され、全国でも珍しいガソリンカーが初めて香川県に登場した。仏生山を始点として塩江までの16ｋｍ余りを約40分で走り、時刻表は25分ごと、1日に計15回運送された。しかし徐々に他の輸送手段との戦争が激しくなるとともに、ガソリン不足・観光客減少など悪条件が重なり、昭和16年４月９日、遂に全線が廃止となった。ガソリンカーもレールも売却されたが、その軌道跡だけは今も「ガソリン道」の愛称で親しまれている。

芝居小屋

法然寺の門前町として松平頼重の手でつくられた仏生山の町は、当初から他の町村とは異なる性格を持っていた。江戸時代、仏生山はこの地域一帯の商業の中心であり、また人々の娯楽の場でもあった。この名残として今でも「芝居町」という町名が残っている。

当時、城下では芝居興行は許されておらず、法然寺開帳の時だけ公演が行われていた。だが江戸時代の終わりには、決められた芝居用地に立派な本建築の常設劇場が建った。上方からの名優が讃岐入りすると、まず一番に仏生山で興行したという。当時の芝居は人形浄瑠璃、歌舞伎などが中心であったが、時には軽業（サーカス）や村芝居なども披露されていた。

たんきり飴

仏生山法然寺の八代住職が風邪を引いて「痰が切れない」とこぼした。地元の飴屋が水飴の中に大豆、ごま、しょうがを入れたものをつくったところ、たちどころに良くなったのが仏生山名物「たんきり飴」のはじまりといわれる。現在でも土産物として愛されている。

菊人形

「菊人形」は、戦後の仏生山の娯楽のひとつ。昭和28年、大阪枚方から菊人形師を招いて開催された。開催期間はおよそ40日、会場は仏生山公園内に建てられた町立文化会館で行なわれた。最盛期の昭和32年頃には、入場者は９万人にも上った。

仏生山競馬場

明治39年頃、仏生山の娯楽には競馬があった。競馬場は平池の堤の上から一段下った中腹を少し削って平らにしたところで、当初は東西に50間（約１００ｍ）ほどの短いコースだった。町内外の有志が楽しみのために飼っている馬を、一回のレースで４、５頭ほど走らせた。「立つ馬場」と呼ばれたコースはその後、二倍ほどの長さ（約２００ｍ）に延長された。昭和に入ると讃岐競馬クラブによって、競走用のトラックと観客用のスタンドを備えた本格的な競馬場が造られた。

大庄屋・別所九兵衛

別所九兵衛包好（かねよし）は、讃岐別所家の祖・長行の子孫。家督を継いで百相の庄屋となった後、大庄屋（香川郡東八ヶ村）も兼務した。村のため常に農事を奨励し、各村ごとに社倉米の制度を設けて余った米を備蓄し、その利益で田畑を購入して自作農（自ら土地を所有した農民）を多くした。また飢饉（ききん）にもよく備え、天明の大飢饉の際にも東八ヶ村からは餓死する者がなかったといわれている。

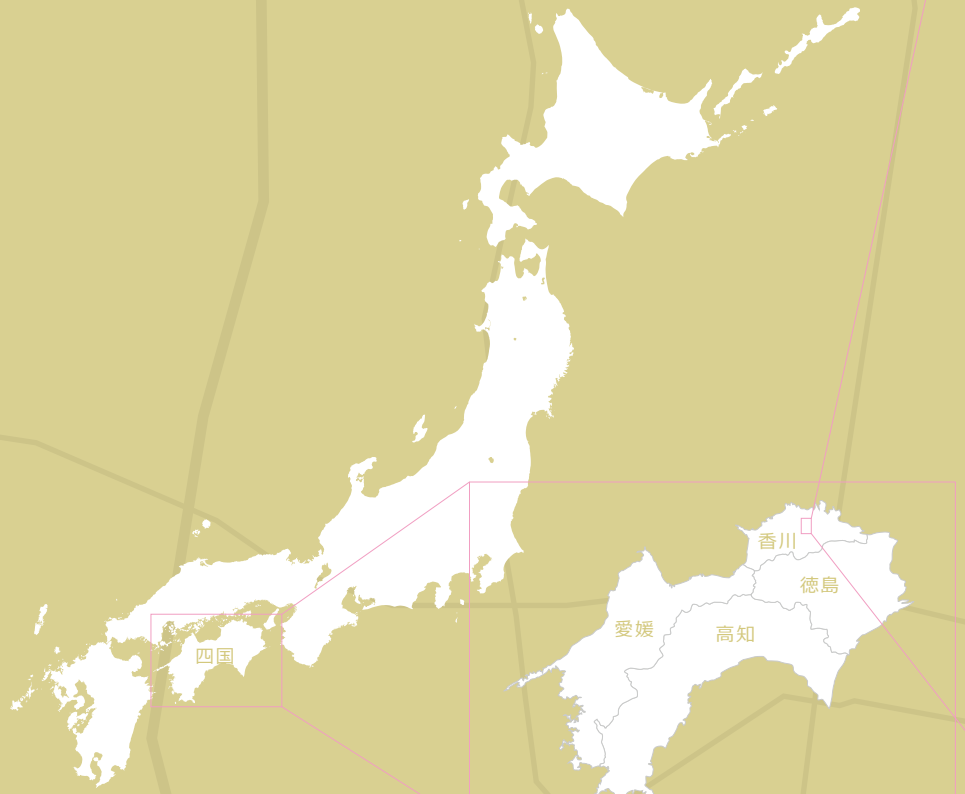
法然寺 花まつり

仏生山町内ではお釈迦様の生まれた日（４月８日）を祝い、花まつりが行なわれきた。かつては子供たちを集めて、お釈迦様にまつわるお話会が開かれたり、作り物の大きな象を引いて、仏生山本町通りを練り歩いたりして祝った。

現在でも、花まつりの日には法然寺の太子堂に小さな花御堂が安置される。季節の花で飾られた美しいお堂の中には、天上を指差されたお釈迦様の立像が祀られ、人々がひしゃくで甘茶をそそいで誕生をお祝いする習わしは昔のままである。

地図であるく仏生山のまち

Walk with tne map of Busshozan town



Busshozan History Guide

歴史案内

ぶっしょうざん
れきしあんない

発行：仏生山コミュニティセンター
香川県高松市仏生山町乙 45-4
TEL/FAX　087-889-4955
発行日：2016 年 2 月

印刷：アイコー印刷
デザイン：坂口祐（物語を届けるしごと）
コラム執筆：石神夏希／乗松真也
コラム話し手：話し手：橋本タカ子さん

参考文献：

香川県情報誌「さぬき野 秋」No.27（香川県、2009 年）
「讃岐ものしり事典」（香川県図書館協会編、1982 年）
「ふるさと仏生山」（仏生山小創立百周年記念事業実行委員会、1992 年）